



ブラジルの豚肉生産・輸出動向

alicセミナー 平成30年6月27日
独立行政法人農畜産業振興機構
調査情報部 佐藤 宏樹
<https://www.alic.go.jp/>

➤ **ブラジルは世界第4位の豚肉生産、輸出国**
→ **成長可能性は？**

➤ **日本向けには2013年以降年間2000トン程度輸出している**
→ **日本向け輸出拡大は可能か？**

1 はじめに ～ブラジルの豚肉の位置づけ～

2 豚肉生産・輸出動向 ～拡大背景、将来性は～

3 輸出拡大への課題 ～生産は伸びるが、輸出は？～

4 まとめ

世界の豚肉生産・輸出上位国（2017年）

順位	国名	生産量 (千トン)
1位	中国	53,500
2位	EU	23,400
3位	米国	11,722
4位	ブラジル	3,725
5位	ロシア	2,960
6位	ベトナム	2,750
7位	カナダ	1,960
8位	フィリピン	1,585
9位	メキシコ	1,430
10位	韓国	1,307

資料：USDA/FAS
注：枝肉重量ベース。

順位	国名	輸出量 (千トン)
1位	EU	2,800
2位	米国	2,589
3位	カナダ	1,330
4位	ブラジル	810
5位	中国	215
6位	チリ	180
7位	メキシコ	160
8位	豪州	42
9位	ベトナム	40
10位	ロシア	25

資料：USDA/FAS
注：枝肉重量ベース。

日本の豚肉輸入国（2017年）

国名	輸入量（トン）
米国	267,295
カナダ	215,622
デンマーク	114,733
スペイン	107,482
メキシコ	86,889
チリ	25,537
ブラジル	1,385
その他	113,117
合計	932,060

資料：「Global Trade Atlas」
注：製品重量ベース。

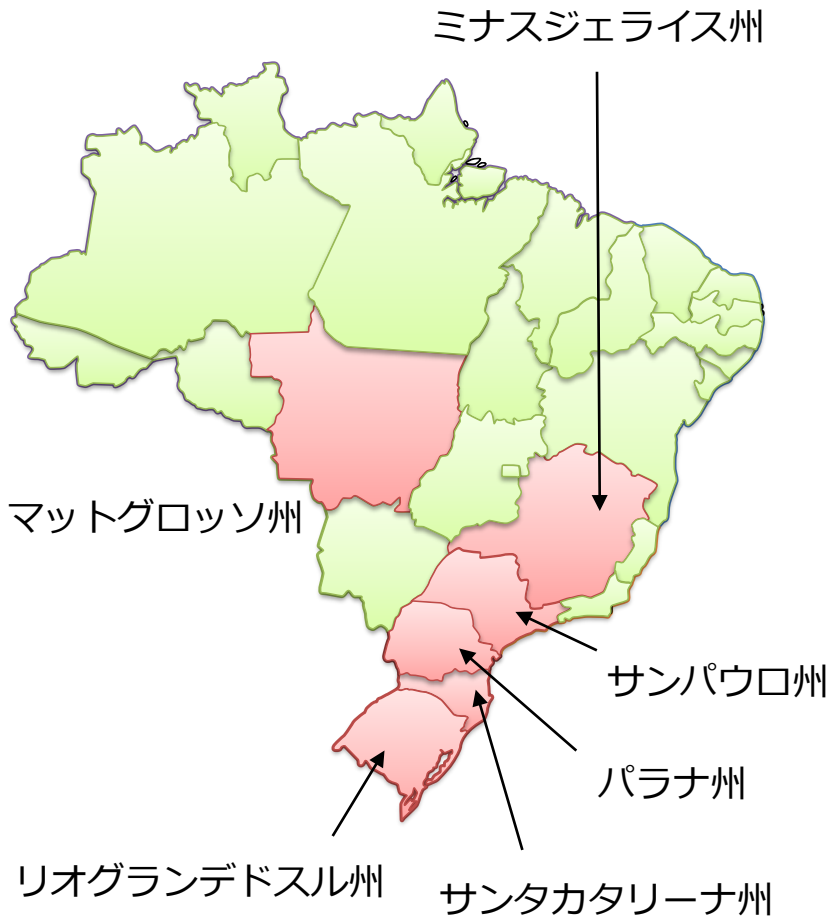
日本の鶏肉輸入国（2017年）

国名	輸入量（トン）
ブラジル	416,814
タイ	127,273
米国	20,798
豪州	1,980
アルゼンチン	1,274
その他	1,374
合計	569,513

資料：「Global Trade Atlas」

➤ 「ブラジルの畜産」といえば、鶏肉のイメージが強い

主な豚肉の生産地域



州別豚肉生産量（2016年）

州名	地域	生産量 (千トン)	国内 シェア (%)
サンタカタリーナ州	南部	969	26.1
パラナ州	南部	778	21.0
リオグランデドスル州	南部	741	20.0
ミナスジェライス州	南東部	452	12.2
マットグロッソ州	中西部	206	5.6
その他		565	15.2
合計		3,711	100.0

州別鶏肉生産量（2016年）

順位および州名	地域	生産量 (千トン)	国内 シェア (%)
パラナ州	南部	4,095	30.9
サンタカタリーナ州	南部	2,121	16.0
リオグランデドスル州	南部	1,618	12.2
サンパウロ州	南東部	1,531	11.6
ミナスジェライス州	南東部	951	7.2
その他		2,920	22.1
合計		13,235	100.0

資料：IBGE（ブラジル国家地理統計院）

➤ 生産地域は豚肉と鶏肉でほとんど同じ

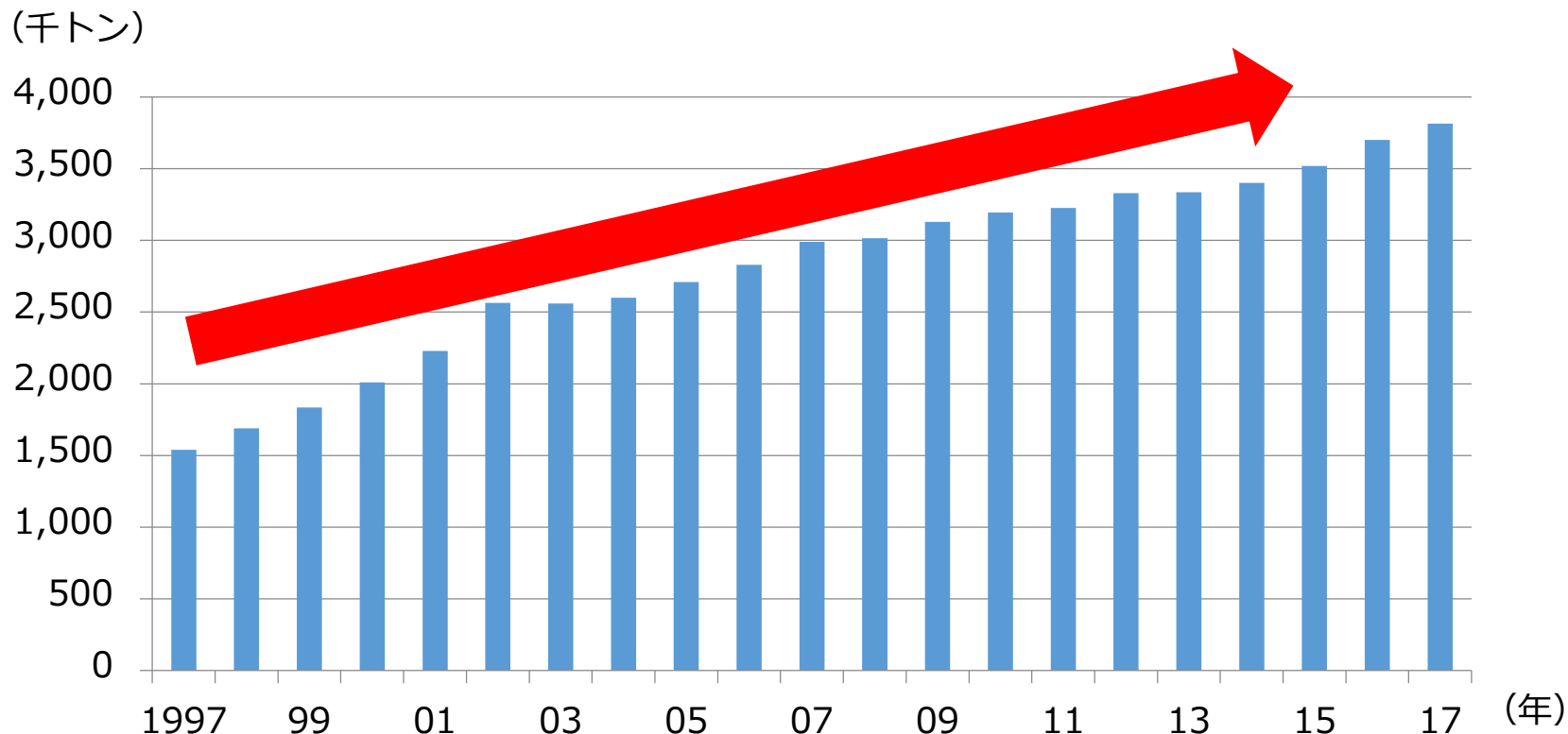
1 はじめに ～ブラジルの豚肉の位置づけ～

2 豚肉生産・輸出動向 ～拡大背景、将来性は～

3 輸出拡大への課題 ～生産は伸びるが、輸出は？～

4 まとめ

ブラジルにおける豚肉生産量の推移



資料：USDA/FAS

注：枝肉重量ベース

- 生産量は20年間で約2.5倍増加
- 直近5年間は、年間平均約10万トンペースで増加
- なぜ生産量が増加しているのか？

▶なぜ生産拡大が進んだのか？

→需要が拡大したため

(1) 内需

人口の増加が需要を牽引

(2) 外需

①豊富な飼料原料 ②インテグレーションの進展

→生産コスト低減

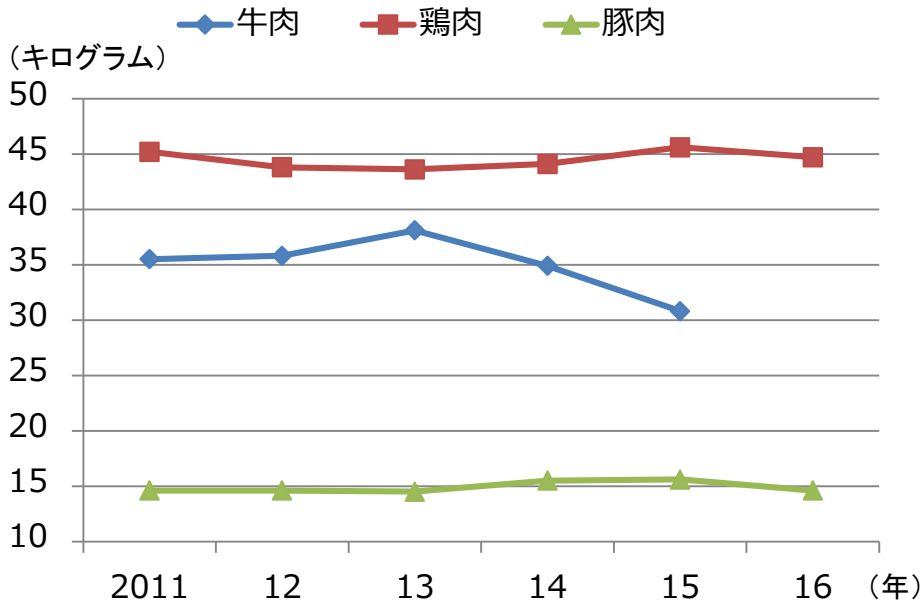
→価格インセンティブが高い

①ロシア向け

②中国向け

→しかし、日本向けへのインセンティブにはならず

ブラジルにおける1人当たり年間食肉消費量の推移

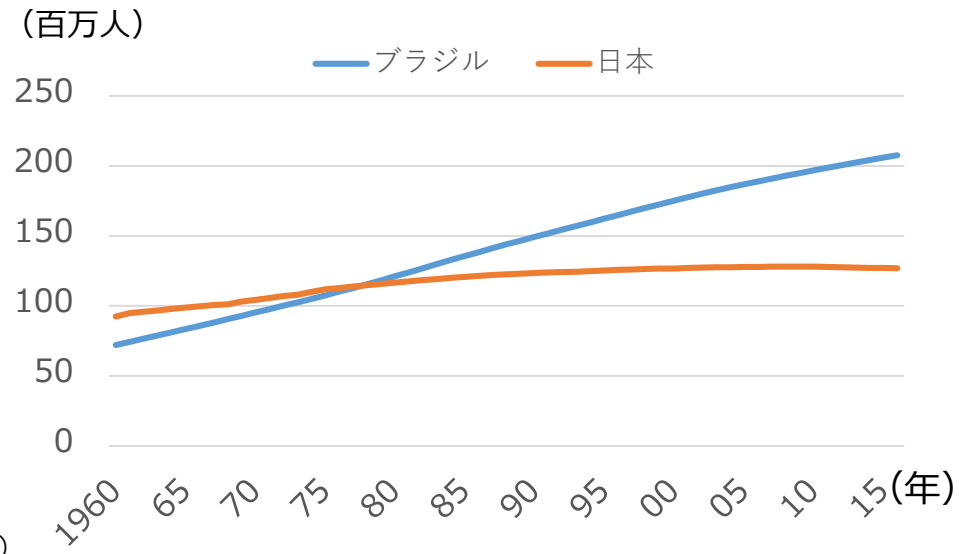


資料: CONAB

注1: 牛肉および豚肉は枝肉重量換算、鶏肉は可食処理換算。

注2: 2016年の牛肉消費量は公表なし。

人口の推移



資料: 世界銀行

➤ 内需中心ではあるが、消費量はほぼ横ばい

➤ 人口の増加が内需拡大の後押しに

→ 1人当たり年間消費量は横ばい、拡大は限定的

➤ 人口は年間約200万人増加 → $200万 \times 15kg = 3万トン$

→ 年間3万トン生産が増加すれば国内消費は賄えるはず？

豚肉

- ▶ ブラジル南部サンタカタリーナ州を中心に、インテグレーションシステムが発達
- ▶ 「豚は汚い」という消費者イメージや、鶏肉との差別化を図るためパッカーがハムやソーセージなどの加工品に注力
→ 生鮮豚肉市場が成熟せず

鶏肉

- ▶ ブラジル南部サンタカタリーナ州を中心に、インテグレーションシステムが発達
- ▶ 低所得者も消費できる食肉として急激に成長



豚肉と鶏肉で国内市場で大きな差

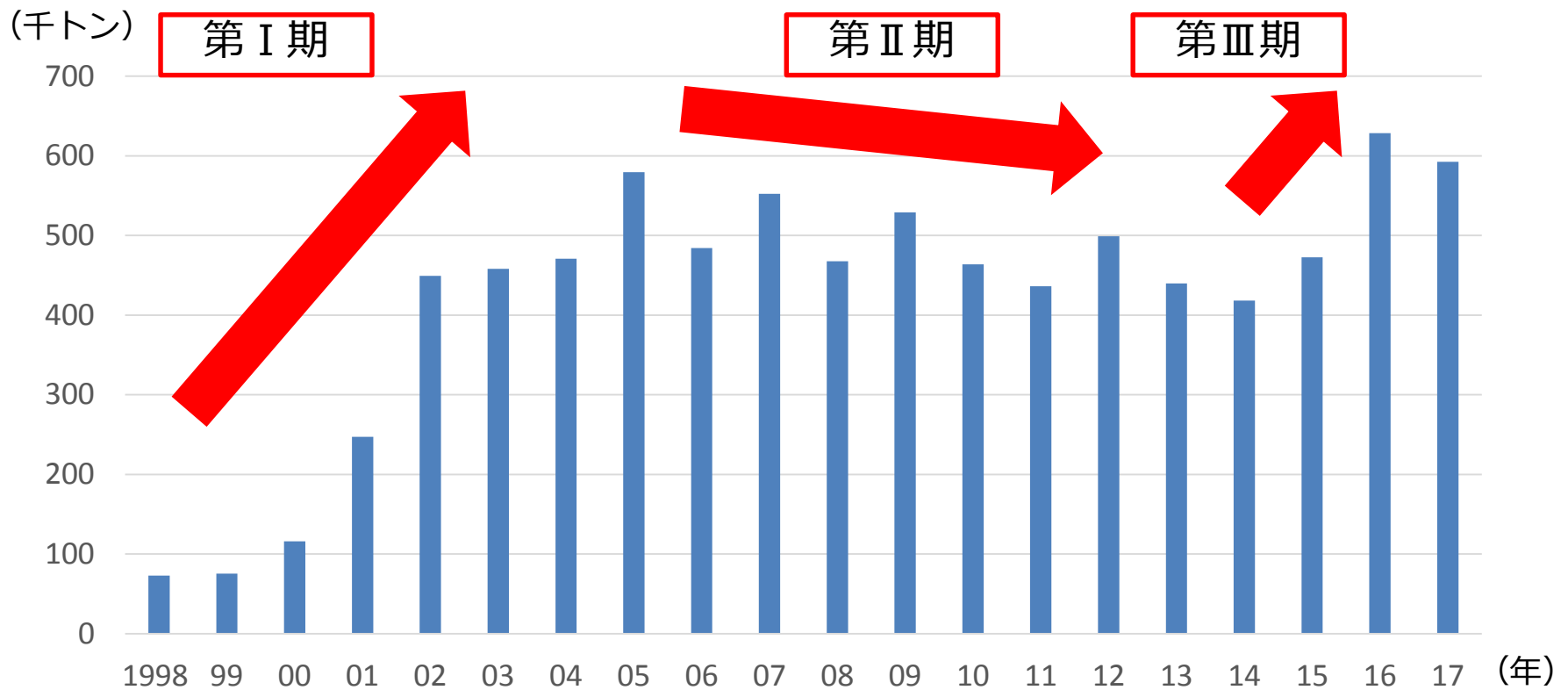
- ▶生産量は伸びた。しかし、内需はあくまでも人口増による需要増に限られる。

→外需 = 輸出に可能性はあるのか？



ブラジルの国民食と言われているフェイジョアーダ

- 第Ⅰ期 2000年代初頭に急増：ロシア向けの拡大
- 第Ⅱ期 2000年代中盤～10年代初頭：他国との競争、市場の閉鎖
- 第Ⅲ期 2016年以降：中国向けの拡大



資料：ブラジル開発商工省貿易局（SECEX）

注：製品重量ベース。

【第Ⅰ期 2000年代初頭に急増：ロシア向けの拡大】

- ・ 2000年以降、同国の経済が回復
 - ・ EUによる同国向けの食肉に対する輸出補助金が中止
- 新たな市場としてロシアを獲得、急速に輸出が**拡大**

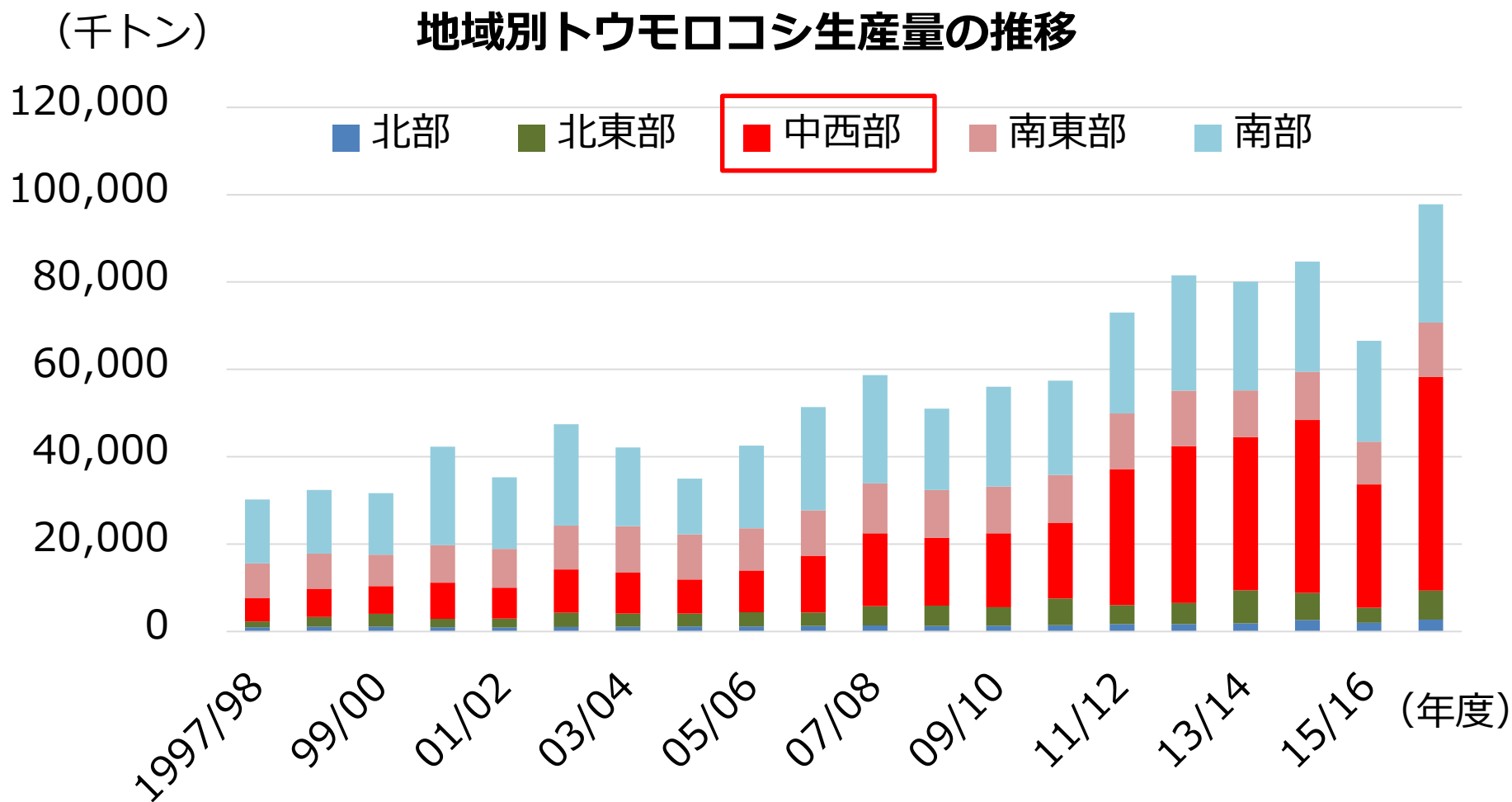
【第Ⅱ期 2000年代中盤～10年代初頭：他国との競争、市場の閉鎖】

- ・ ロシアからの引き合いで左右される輸出量
- 2008年：国際金融危機、10-11年：ユーロ安によるEU産との競争激化
- ・ 13-14年：主要輸出先だったウクライナでの政情不安による大幅減
- 生産力は拡大しているものの、大きな輸出増には至らず

【第Ⅲ期 2016年以降：中国向けの拡大】

- ・ 中国向けが5225トン→8万7650トンへ**急拡大**
- 同国での需給ひっ迫が背景
- ・ 2017年は前年を下回ったものの、2018年は2016年を上回る勢い
- 安定的？それとも一過性？市場維持が重要

**巨大市場開拓により拡大。では拡大余力はどのようにして
生まれたのか？**



資料：CONAB（ブラジル国家食糧供給公社）
注：年度は10月～翌9月。

州別豚肉生産量（枝肉重量ベース）の推移

州	2006年（トン）	2016年（トン）	増減率（%）
サンタカタリーナ州	681,669	968,831	42.1%
パラナ州	390,394	777,745	99.2%
リオグランデドスル州	534,944	741,366	38.6%
南部3州合計	1,607,007	2,487,942	54.8%
マットグロッセ州	69,798	206,460	195.8%
その他	621,437	1,016,833	63.6%
合計	2,298,242	3,711,235	61.5%

資料：IBGE

→近年は、トウモロコシ生産の中心地であるマットグロッセ州の伸びに期待。

- ・ 鶏肉産業同様、インテグレーションが生産の中心
- ・ 多くのインテグレーターでは、飼料や原種豚の自社生産を行う
 - 原種豚から肉豚まで一貫した戦略的な豚肉作りが可能に
- ・ 一貫農場は少なく、繁殖と肥育で生産者が分かれていることが多い
 - 実質的なマルチサイトシステム
疾病リスクの軽減

【背景】

- ・ OIEがサンタカタリーナ州を口蹄疫ワクチン非接種清浄地域と認定（2007年）
- 市場拡大の要因の1つに
インテグレーション進展のきっかけ

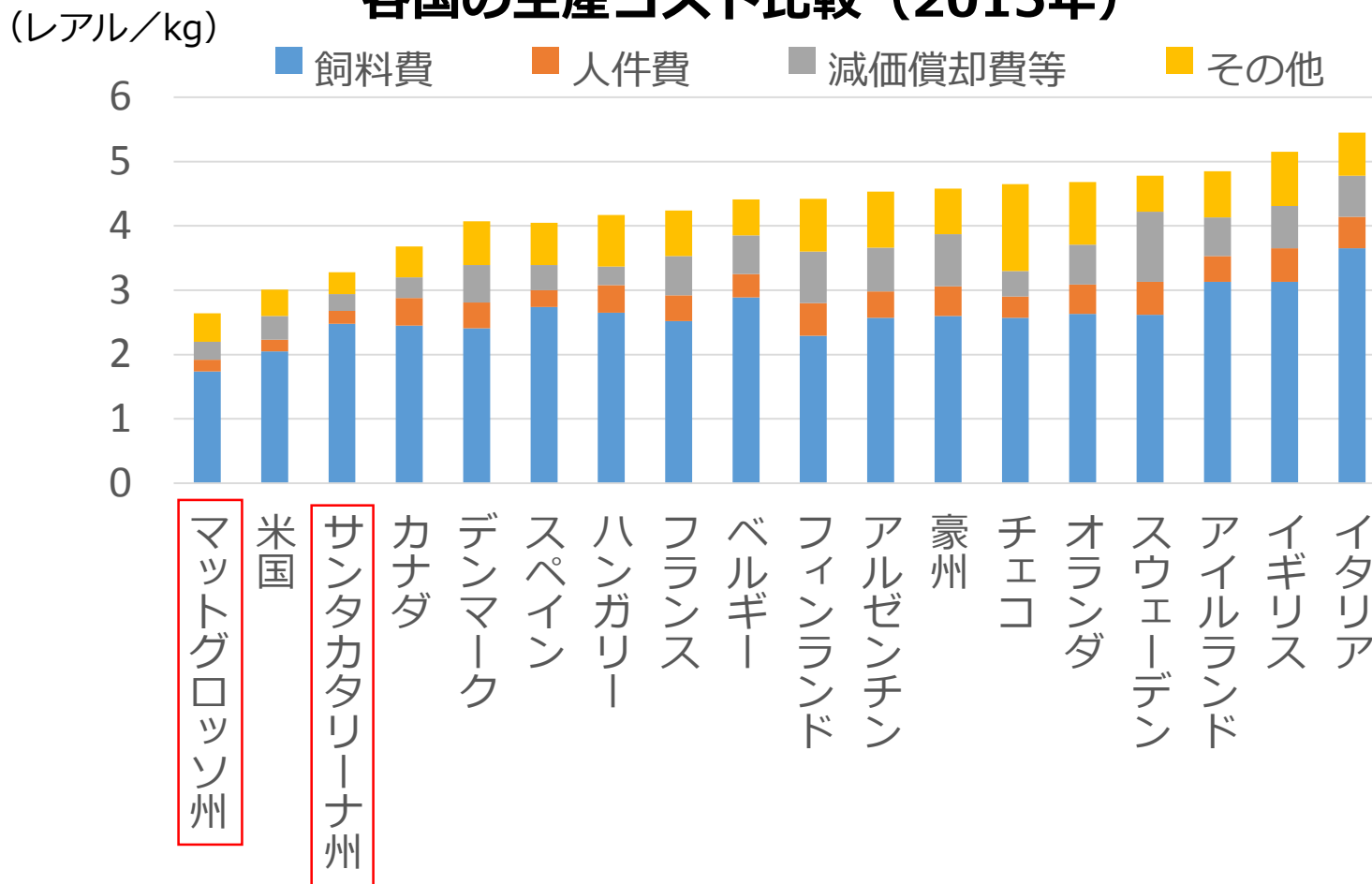
【大手食肉企業の動き：2009年】

- ・ サジア社（当時1位）とペルジゴン社（当時2位）が合併
- ブラジルフーズ（BRF）社の誕生
- ・ JBS社とベルチン社が経営統合
ピルグリム・プライド社（米国）を買収

輸出量としては伸びていない時期

→食肉の多国籍企業として、食肉の輸出志向性を高めていく

各国の生産コスト比較（2015年）



資料：Inter Pig

- ・生産コスト安→輸出拡大の大きな価格インセンティブ
→中国やロシアなどへの輸出では大きな強みに

- **ブラジル産豚肉は、2000年以降、ロシアや中国などの市場を獲得し、価格インセンティブなどを強みに輸出を拡大してきた**

→現状は？そして将来性は？

→肝心の日本向け拡大の可能性は？

- 禁輸の影響で主要輸出先だったロシア向けが大幅減
- 中国向けが2017年の輸出量を超える勢いを見せており、ロシアの減少分を一部補完

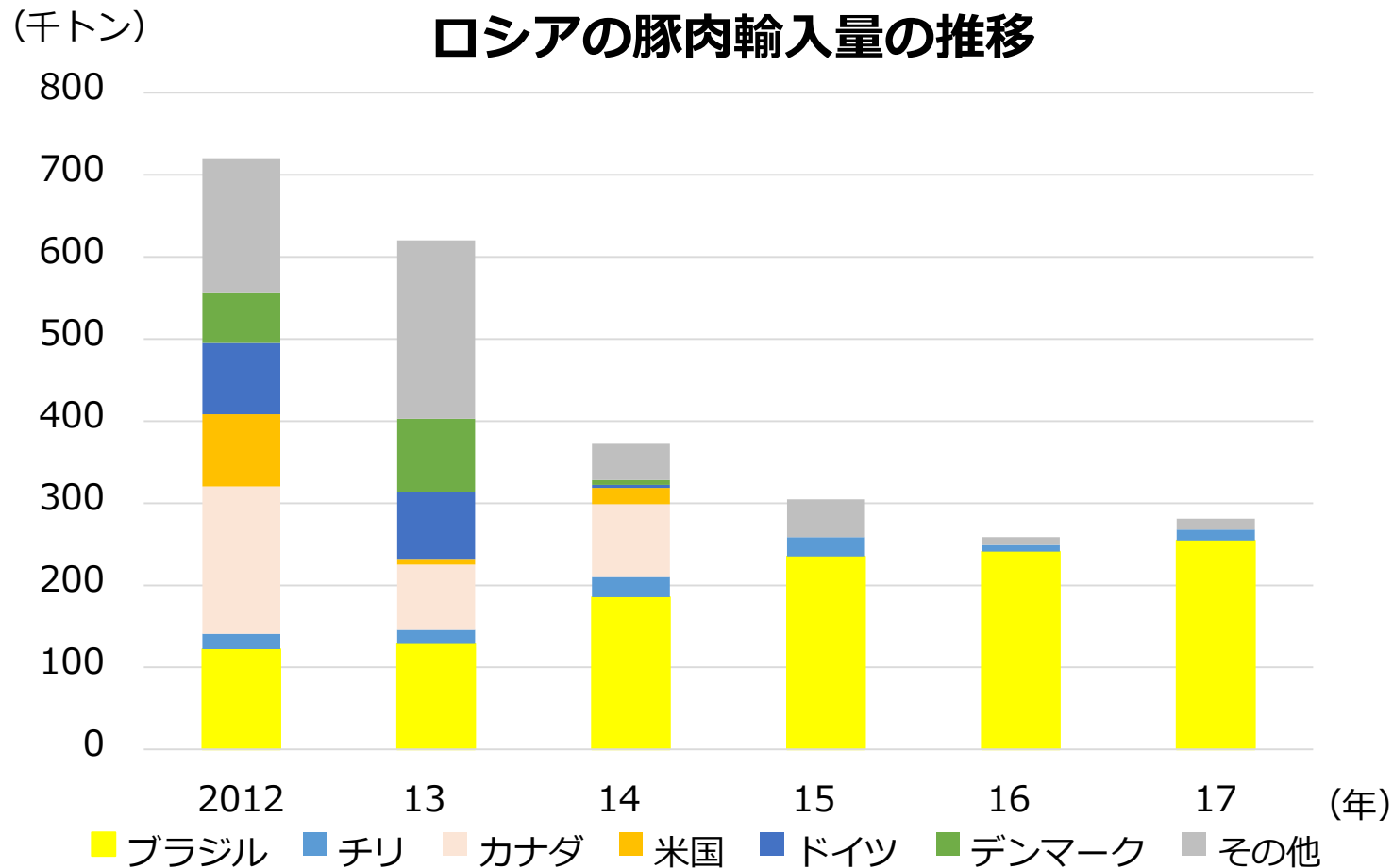
輸出先国	2016年 (トン)	2017年 (トン)	前年同期比 (増減率)
ロシア	236,892	252,430	6.6%
香港	108,986	96,108	▲ 11.8%
中国	87,560	48,914	▲ 44.1%
アルゼンチン	24,402	31,576	29.4%
シンガポール	32,622	31,910	▲ 2.2%
ウルグアイ	27,505	29,806	8.4%
チリ	23,079	23,376	1.3%
日本	1,693	1,605	▲ 5.2%
その他	85,916	76,889	▲ 10.5%
合計	628,655	592,614	▲ 5.7%

輸出先国	2017年 1～3月 (トン)	2018年 1～3月 (トン)	前年同期比 (増減率)
ロシア	66,192	117	▲ 99.8%
香港	23,776	31,311	31.7%
中国	15,569	39,175	151.6%
アルゼンチン	10,162	9,629	▲ 5.2%
シンガポール	8,278	8,691	5.0%
ウルグアイ	6,345	8,436	32.9%
チリ	5,448	7,081	30.0%
日本	509	442	▲ 13.2%
その他	17,165	24,421	42.3%
合計	153,445	129,304	▲ 15.7%

資料：ブラジル開発商工省貿易局（SECEX）

注：製品重量ベース。

➤2014年8月に欧米諸国に対する禁輸措置を講じて以降、ブラジルへの依存度を高めていた。



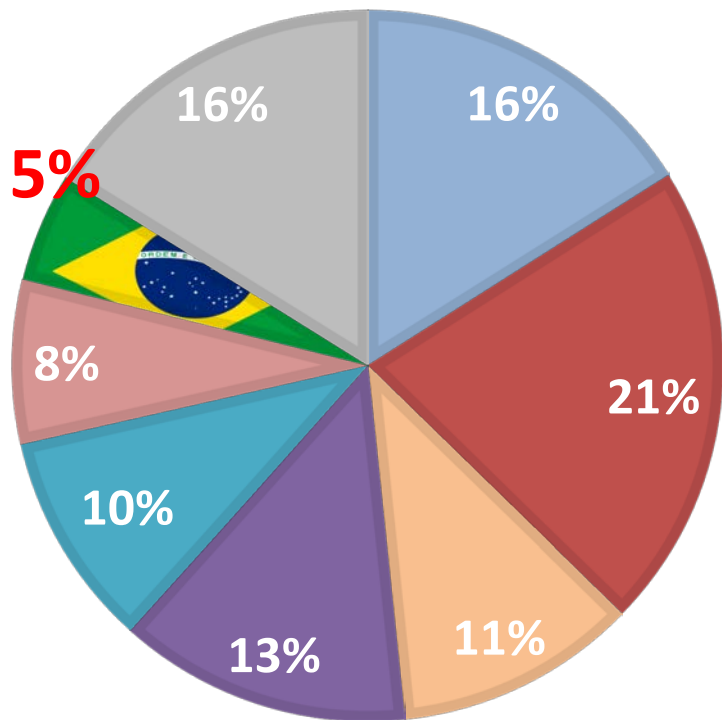
資料：「Global Trade Atlas」

注：製品重量ベース。

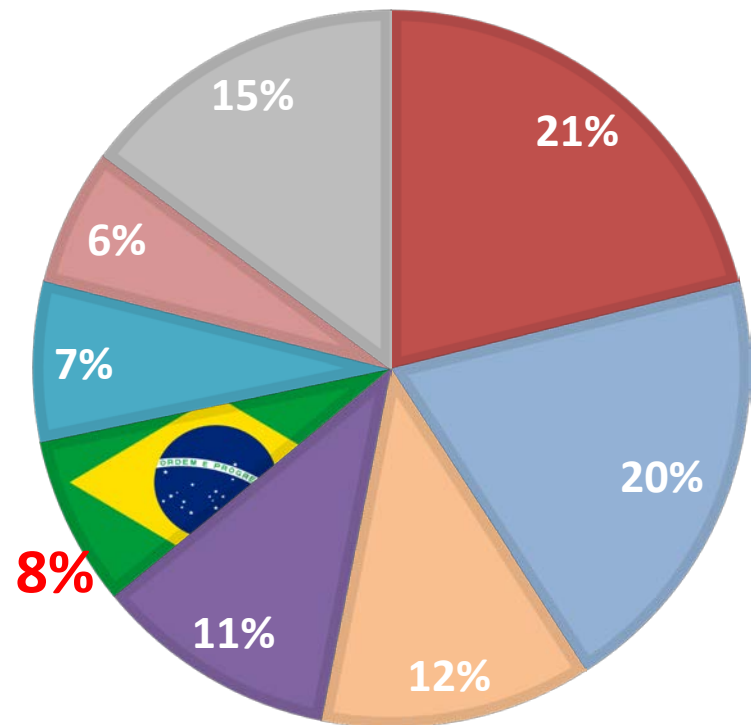
- しかし、2017年12月からロシアがブラジル産豚肉の輸入を停止
- ロシアが禁止している成長促進剤のラクトパミンを使用していた疑い
- 国内の生産力を強化したいというロシアの思惑も

中国の豚肉輸入先国別割合

2017年



2018年1～3月



➤中国ではEU諸国に遅れを取っているものの、年々存在感は高まっている

➤仕向け部位は、他国からあまり引き合いがない耳や脚などの低級部位が中心

- 2013年5月から、口蹄疫ワクチン非接種清浄地域であるサンタカタリーナ州からのみ輸出可能に
- 以降、年間2000トン程度輸入している
 - 2017年までは、シンガポール向けもサンタカタリーナ州からのみの輸出だったが、年間3万トン以上輸出していた
 - 日本向け輸出拡大も不可能ではない？



しかし！

- 日本は、同じ南米では長年チリから輸入している
 - 規格対応力に差、またEPAによる優位性も大きい

1 はじめに ～ブラジルの豚肉の位置づけ～

2 豚肉生産・輸出動向 ～拡大背景、将来性は～

3 輸出拡大への課題 ～生産は伸びるが、輸出は？～

4 まとめ

日本における豚肉輸入国 (2017年)

国名	輸入量 (トン)
米国	267,295
カナダ	215,622
デンマーク	114,733
スペイン	107,482
メキシコ	86,889
チリ	25,537
ブラジル	1,385
その他	113,117
合計	932,060

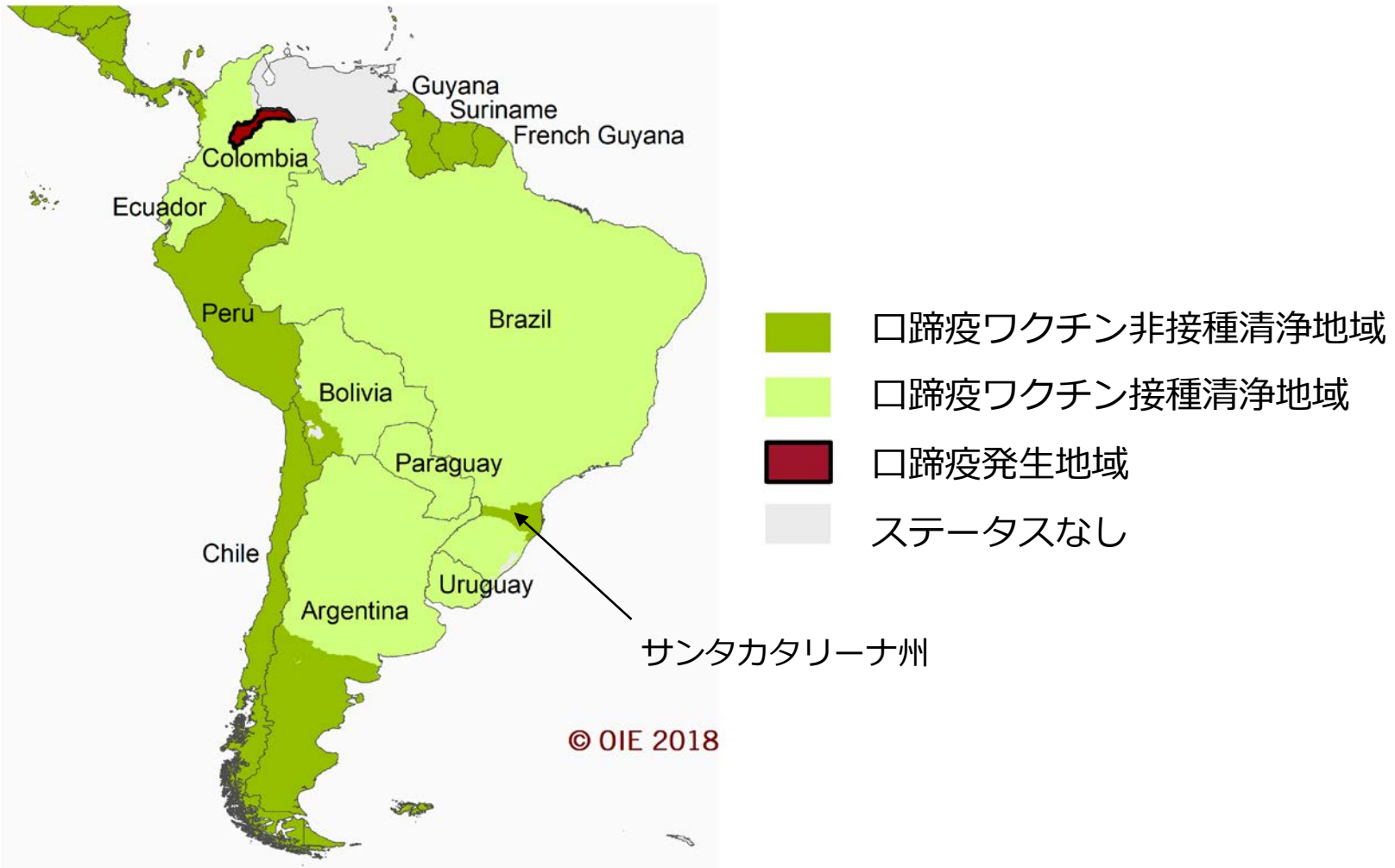
資料：「Global Trade Atlas」
注：製品重量ベース。

韓国における豚肉輸入国 (2017年)

国名	輸入量 (トン)
米国	152,890
ドイツ	110,439
スペイン	60,889
カナダ	35,090
チリ	27,410
オランダ	22,243
メキシコ	15,340
その他	65,209
合計	489,510

資料：「Global Trade Atlas」
注：製品重量ベース。

➤特に、日本や韓国など、アジア圏の消費国に仕向けられていない



▶ サンタカタリーナ州のみが口蹄疫ワクチン非接種清浄地域

▶ 日本、韓国などは口蹄疫ワクチン非接種清浄地域からの輸入に限定されている

- 世界第4位の輸出国とはいえ、国際市場においては、米国やEUの後塵を拝している
- ロシアに仕向けられない今、中国でのシェアをどこまで高められるかがポイント
- 地理的な問題から、輸出の99.9%が冷凍になっているのも、米国やEUとの差を生む要因の一つに

【制限要因】

- ・ 口蹄疫の発生により、国際市場に出遅れ
- ・ 日本や韓国に対する輸出インセンティブの不足
 - チリやメキシコは、日本とEPAを締結
低い関税率での輸出が可能
 - 太平洋側に面していないこともチリとの大きな差
- ・ ストライキの発生などによる船積み遅れ
 - ブラジルから輸入するメリットが少ない？ 不安要素

【拡大要因】

- ・ 2017年11月以降、シンガポール向けにサンタカタリーナ州以外からの輸出も可能に
→数量拡大に期待
- ・ 2018年5月、ブラジル全土が口蹄疫ワクチン接種清浄地域に
(サンタカタリーナ州は非接種清浄地域)
→MAPAは、2023年までに口蹄疫ワクチン非接種清浄国を目指すと発表
→将来的な輸出市場拡大要因になるか



急激な拡大は難しい？
安定的な市場の維持・確保がポイント

1 はじめに ～ブラジルの豚肉の位置づけ～

2 豚肉生産・輸出動向 ～拡大背景、将来性は～

3 輸出拡大への課題 ～生産は伸びるが、輸出は？～

4 まとめ

□ 現状

- 豚肉産業は、生鮮市場の成長遅れなどにより、鶏肉産業と大きな差
- ネガティブイメージもあり、消費量も鶏肉、牛肉の後塵を拝している。

□ 見通し

- 豊富な飼料供給力から、生産量は拡大見込み
- 輸出拡大は、余力はあるが安定的な市場の確保が課題
- 日本向け輸出は、ブラジル側の数量確保は見込めても、日本側の引き合いが強まるかは微妙

ご清聴ありがとうございました。

「畜産の情報」2018年5月号に掲載しております。

本情報は、情報提供を目的とするものであり、取引・投資判断の基礎とすることを目的としていません。本資料の正確性の確認等は、各個人の責任と判断でお願いします。提供した情報の利用に関連して、万一、不利益が被る事態が生じたとしても、ALICは一切の責任を負いません。

※ メールマガジンのご案内

独立行政法人農畜産業振興機構は、情報誌「畜産の情報」を毎月発行し、ホームページでも提供しているほか、メールマガジンにより、毎月2回（5日、25日）、最新の情報を配信しています。

メールマガジンの配信を希望される方は、機構ホームページ（<https://www.alic.go.jp>）右の「メールマガジン」ボタンからご登録ください。

